

I スポーツ情報への接触を通じた 新しいスポーツへの関わり方

笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所
研究員 藤岡 成美

はじめに

スポーツは「する」「みる」「ささえる」といった3つの側面が主として語られてきており、これまでにスポーツ実施状況やスポーツ観戦状況、スポーツボランティアに関してさまざまな視点から調査・研究が行われてきた。

一方で、日常生活の中では、新聞やテレビ、インターネットといったメディアを通してスポーツの情報に触れたり、スポーツを題材とした小説、マンガ、ゲームといった

娯楽を楽しんだりする場面も少なくない。

そこでスポーツライフに関する調査2016では、このようなスポーツに関する情報への接触を「スポーツアクセス行動」として項目別に頻度をたずね、性別、年代別による差異を確認した。さらに、スポーツアクセス行動に影響を与えていると想定される「みる」スポーツ、すなわち、直接スポーツ観戦状況との関連をみた。

I-1 性別にみるスポーツアクセス行動

本調査では、過去1年間のスポーツ情報へのアクセス行動10項目について、「1. よくした」「2. 時々した」「3. ほとんどしなかった」「4. まったくしなかった」の4段階でたずね、「1. よくした」および「2. 時々した」と回答した者の割合を行動率として算出した。なお、回答者のうち、スポーツ情報へのアクセス行動10項目についてすべて回答した者を分析対象とした。

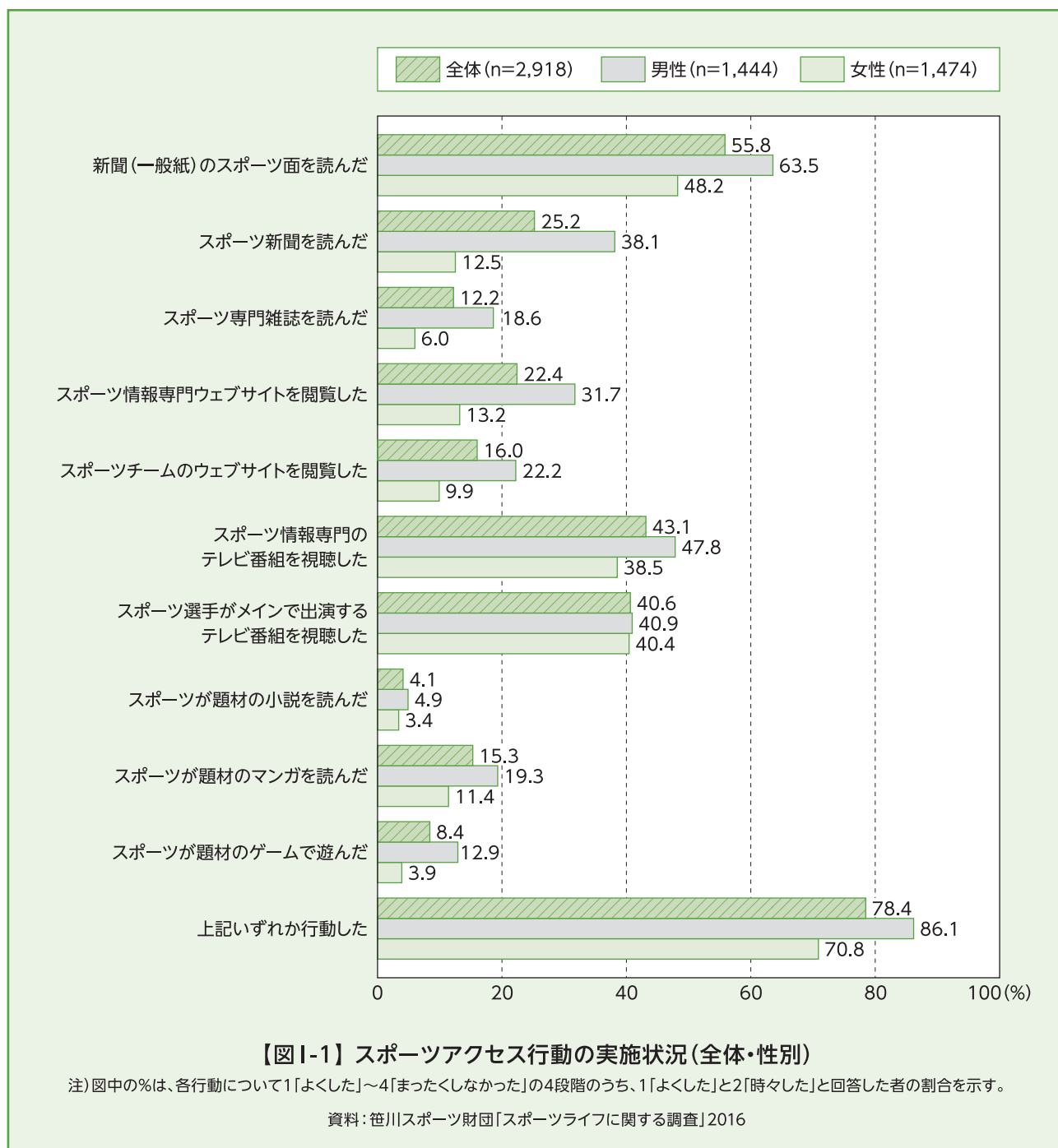
10項目のスポーツアクセス行動のうち、いずれか1項目でも行動した者は全体で78.4%であり、18歳以上の約8割が過去1年間に何らかのスポーツアクセス行動を取った様子がわかる(図I-1)。

項目ごとに行動率をみると、「新聞(一般紙)のスポーツ面を読んだ」55.8%が最も高く、次いで「スポーツ情報専門のテレビ番組を視聴した」43.1%、「スポーツ選手がメインで出演するテレビ番組を視聴した」40.6%となった。一方、「スポーツが題材の小説を読んだ」4.1%、「スポーツが題材のゲームで遊んだ」8.4%、「スポーツ専門雑誌を読んだ」12.2%、「スポーツが題材のマンガを読んだ」15.3%、「スポーツチームのウェブサイトを開覧した」16.0%となっており、行動率が2割に満たない項目もあった。一般紙のスポーツ面やテレビといった、ある程度受動的に得られる情報への行動率が高く、能動的に

得る情報への行動率は低い結果が見て取れる。

性別にみると、いずれか行動した者の割合は男性86.1%、女性70.8%であり、女性に比べて男性が15.3ポイント高い。項目ごとにみると、「新聞(一般紙)のスポーツ面を読んだ」は男性63.5%、女性48.2%、「スポーツ新聞を読んだ」は男性38.1%、女性12.5%、「スポーツ情報専門のテレビ番組を視聴した」は男性47.8%、女性38.5%、「スポーツ選手がメインで出演するテレビ番組を視聴した」は男性40.9%、女性40.4%と、上位3位に入る行動は男女ともに共通である。

10項目すべての行動において、女性よりも男性の行動率が高いが、「スポーツ新聞を読んだ」(男性38.1%、女性12.5%)は25.6ポイントの差がみられ、性差が大きい。一方、「スポーツ選手がメインで出演するテレビ番組を視聴した」は男性40.9%、女性40.4%と性差が小さい。同様に「スポーツ情報専門のテレビ番組を視聴した」も男性47.8%、女性38.5%と他の項目よりも比較的差が小さく、女性のスポーツアクセス行動はテレビの視聴が特徴的となっている。



1-2 年代別のスポーツアクセス行動

年代別にみると、10項目のスポーツアクセス行動のうち、過去1年間にいずれか行動した者の割合は、年代が上がるにつれて高くなる(図1-2)。最も高いのは60歳代の84.9%であるが、最も低い18・19歳でも69.4%と、約7割が何らかのスポーツアクセス行動を取っている。

項目ごとに行動率をみると、18・19歳、20歳代、30歳代は「スポーツ情報専門のテレビ番組を視聴した」がそれぞれ37.5%、40.6%、42.1%と最も高い。一方で40歳代以上では「新聞(一般紙)のスポーツ面を読んだ」

が40歳代57.1%、50歳代66.3%、60歳代73.2%、70歳以上64.7%と最も高くなる。「新聞(一般紙)のスポーツ面を読んだ」や「スポーツ新聞を読んだ」は、年代が上がるにつれて行動率が高くなる一方で、18・19歳や20歳代といった若年層は「スポーツが題材のマンガを読んだ」「スポーツが題材のゲームで遊んだ」「スポーツが題材の小説を読んだ」といった娯楽を通じたスポーツアクセス行動が他の年代と比較して高い特徴がみられた。

1-3 直接スポーツ観戦状況別のスポーツアクセス行動

スポーツアクセス行動に影響を与えていると想定される直接スポーツ観戦状況との関連をみると、10項目のスポーツアクセス行動のうち、いずれか行動した者の割合は非観戦者72.2%、観戦者91.0%となり、年1回以上直接スポーツ観戦を行っている者のスポーツアクセス行動の高さがうかがえる(図1-3)。

項目ごとにみると、「新聞(一般紙)のスポーツ面を読んだ」は非観戦者49.7%、観戦者68.2%、「スポーツ情報専門のテレビ番組を視聴した」は非観戦者36.2%、観戦者57.3%、「スポーツ選手がメインで出演するテレビ番組を視聴した」は非観戦者34.7%、観戦者52.8%であり、

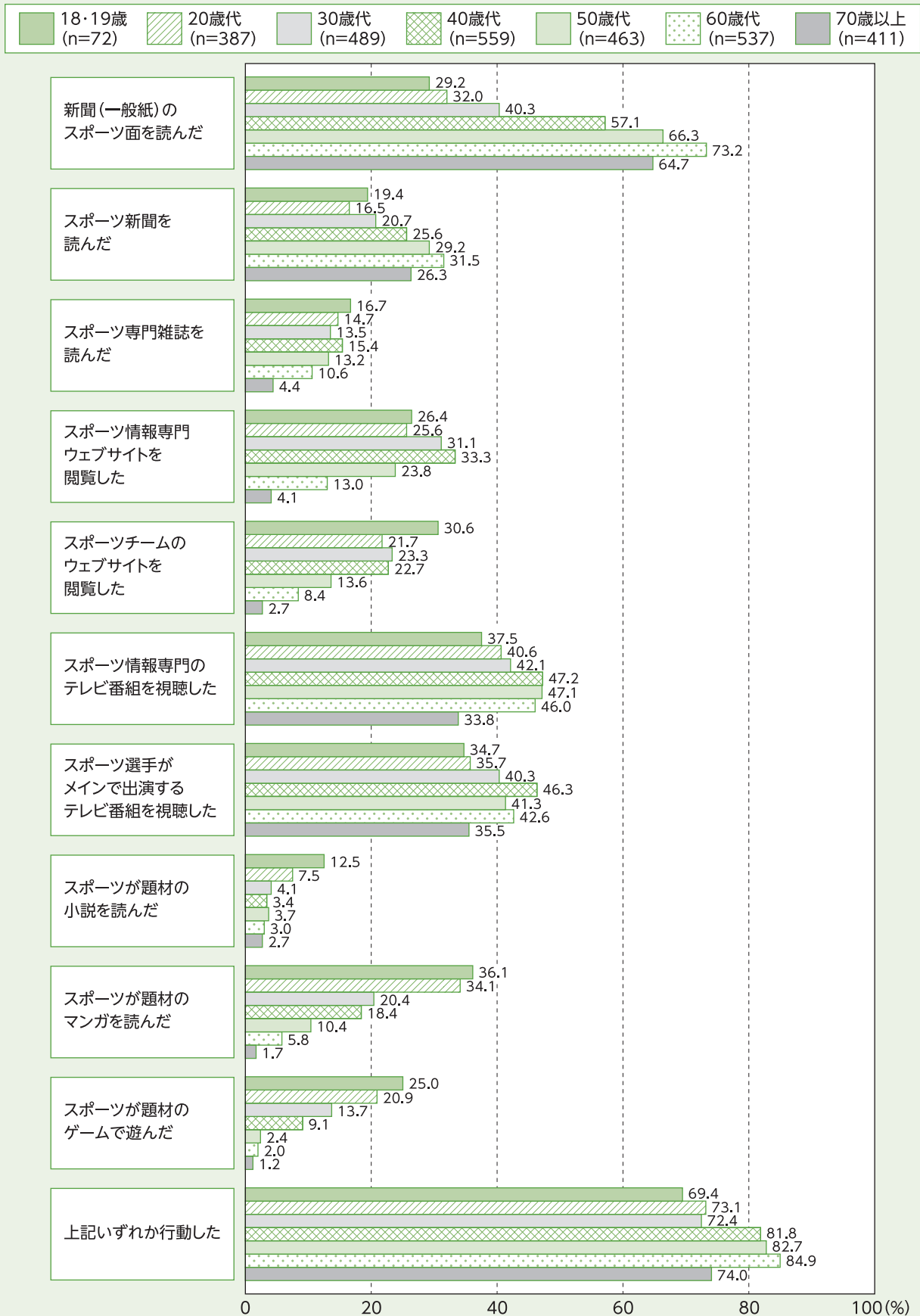
非観戦者・観戦者ともに行動率上位3位に入る項目は変わらない。ただし、すべての項目で非観戦者よりも観戦者の行動率が高く、両者における差は「スポーツが題材の小説を読んだ」「スポーツが題材のマンガを読んだ」「スポーツが題材のゲームで遊んだ」といった娯楽を除けば18~24ポイントと大きく開いている。

直接スポーツ観戦状況の有無により、「どのスポーツアクセス行動を取るか」という行動の種類には大きな違いはみられないが、「スポーツアクセス行動をどれぐらい行うか」という頻度を各行動ごとにみると、非観戦者よりも観戦者のほうが高かった。

COMMENTS

資料: 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016

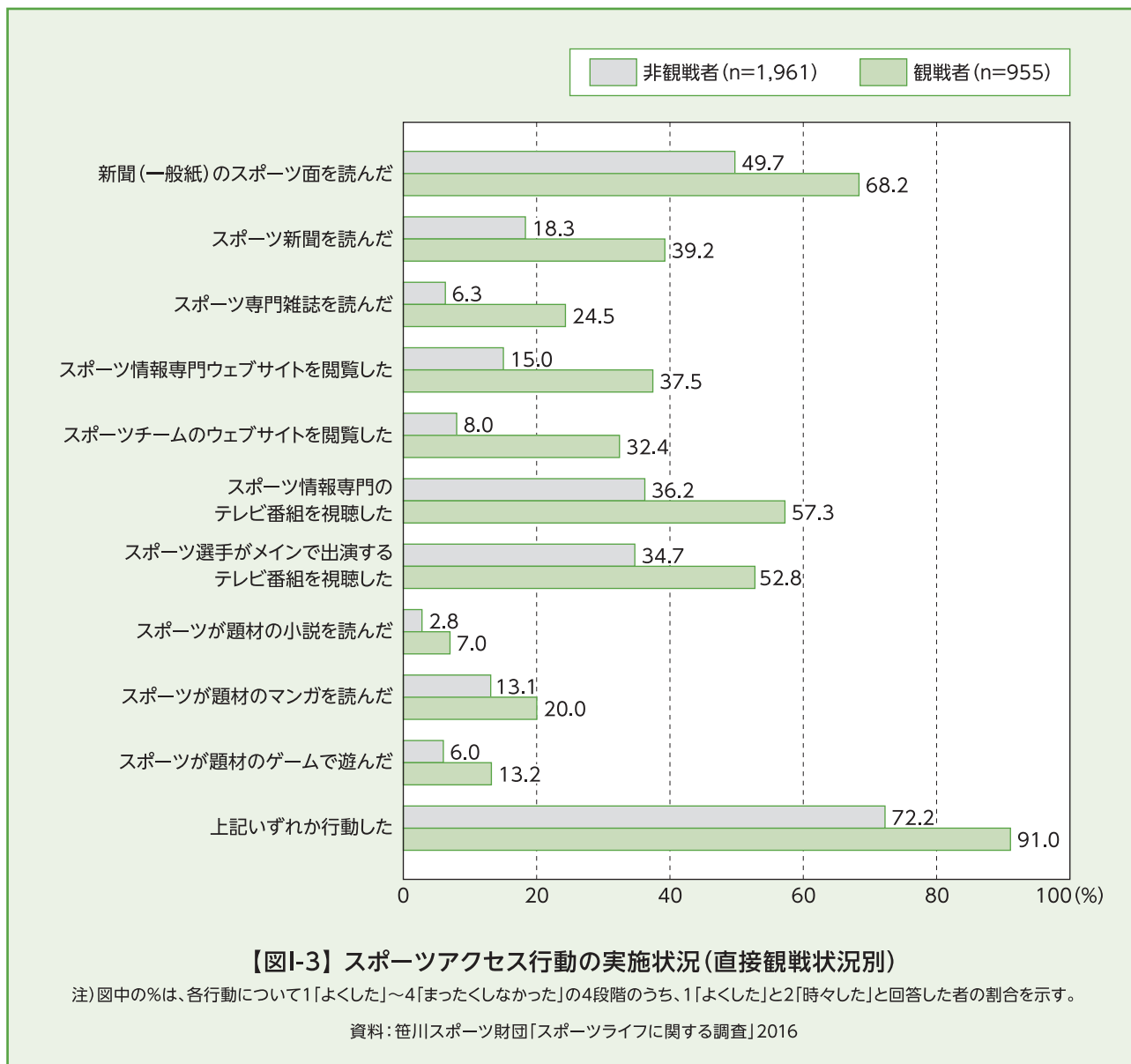
- スポーツのテレビ中継があれば楽しんで観ていますが、サッカーやプロ野球などに片寄っているような気がします。マイナーなスポーツが放映していれば視聴しますが、なかなか機会に恵まれません。また、地元で開催される試合にも行きたいとは思いますが、ひとりでは行きづらいので、「みんなで観戦しよう」といった企画があれば良いと思います。(女性 59歳 専業主婦・主夫)
- テレビ、新聞、インターネットでよく見るのは何といてもスポーツだ。楽しませてもらっているが、賭博事件などの悪いニュースはとても残念である。(男性 64歳 専門的・技術的職業)
- 自分自身が体を動かして運動する機会は無くなってしまっていますが、観戦するのは好きなので色々なスポーツ観戦はしてみたいです。オリンピックやワールドカップなどの大きな大会の時は、マイナーな競技や日本戦以外も見てみたいと思います。(女性 42歳 専業主婦・主夫)



【図1-2】スポーツアクセス行動の実施状況(年代別)

注) 図中の%は、各行動について1「よくした」～4「まったくしなかった」の4段階のうち、1「よくした」と2「時々した」と回答した者の割合を示す。

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016



まとめ

本稿では、「する」「みる」「ささえる」以外のスポーツへの関わり方として、スポーツアクセス行動の実態を明らかにした。全体をみると、18歳以上の男女の約8割がスポーツアクセス行動を取っている。性別にみると、女性よりも男性の行動率が高いが、女性はテレビ視聴によるアクセス行動に特徴がある。年代別にみると、18・19歳および20歳代の若年層はマンガ・ゲームといった娯楽へのアクセスが多く、40歳代以上では新聞(一般紙)へのアクセスが多い。直接スポーツ観戦状況別にみると、

行動の内容に違いはないが、観戦者のほうが各行動の頻度が高いという結果が得られた。

これらの結果から、これまで主として調査されてきた「する」「みる」「ささえる」といった行動以外でも、スポーツに関わっている者も多く、関わり方が多様化している様子がうかがえる。スポーツアクセス行動も、スポーツへの関わり方のひとつとして、新たなスポーツライフの可能性を提示しているといえるだろう。